

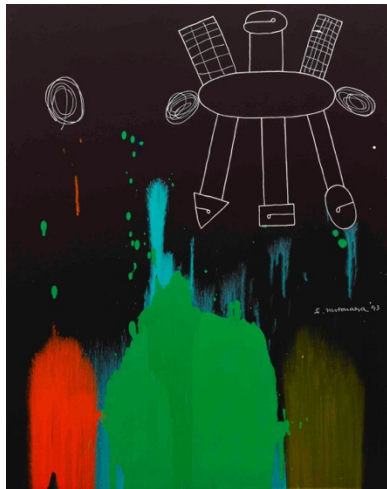
生誕100周年記念

元永定正：さんかくまるしかく

ファーガス・マカフリー 東京

2022年11月26日～2023年2月18日

ファーガス・マカフリー 東京は11月26日より、元永定正生誕100周年を記念し、1990年から99年にかけて制作された作品14点を展示する「さんかくまるしかく」展を開催します。期間は2023年2月18日までとなります。



元永定正「しろいせんのかたち」1993

漫画家としての訓練を積み、1940年代後半に地元の雑誌や新聞などのイラストを描き生計を立てていた元永は、1955年、具体美術協会へ初期会員として参加します。吉原治良、白髪一雄、村上三郎ら他の具体第一世代のアーティストたちとともに、第二次世界大戦後、実験的な芸術、自由、個性の精神を打ち立てます。過去の保守的姿勢や軍国主義からの脱却を目指し、吉原はメンバーに「今までにないものをつくれ」と主張しました。その言葉の通り独創性を重視した元永は絵画、彫刻、水のインスタレーション、煙のパフォーマンスなどインタラクティブな遊び心を強調し、喜びを誘発する多彩な作品で、吉原の信念に応えることとなります。

1960年代後半、プロセスを重視する抽象表現が具体美術の覇権的ともいえる特徴として認識されるようになると、元永はそこからの脱却を目指すようになります。1966年から67年にかけてニューヨークのレジデンス・プログラムに参加したことによって、具体との距離感と考

えるスペースを得た彼は、具体以前、具体初期時代の豊穡な制作態度に立ち戻ります。初期の作品に見られた擬人化された形を復活させ、エアブラシの技法を採用し、次第にストリート・カルチャーやアニメの美学をハイアートの領域へと融合し始めます。1970年代後半になると、元永の大きな身振りの筆跡、スクラッチがほどこされたピクトグラム、エアブラシのドリップが重なり、それはベルリンのラインハルト・ポッツ、ケルンのアルベルト・ウーレン、ニューヨークのジャン＝ミシェル・バスキアやキース・ヘリングらと共に出現した「バッド・ペインティング」の時代的な流れに適合します。

しかし、元永の作品に政治的要素が加わることはなく、子供の絵本、インタラクティブな公共の彫刻、パブリック・パフォーマンス、美術教育を通じて、美術専門外の観客に芸術を届けようとする、彼の作品はそれまでの例にない開放的なアートという特別なジャンルに属するものでした。そこでは言語による読解ができないリズムカルなフォルム、渦巻く線、浮かぶ形による、言葉を介さないダイレクトなコミュニケーションを楽しむことができるのです。



元永定正「あかいながれやせんかたち」1998



元永定正「しろいせんかたちはくろのなか」 1996

元永定正は2011年10月3日、宝塚市没。兵庫県立美術館(1998年)、広島市現代美術館(2003年)、長野県立信濃美術館(2005年)、三重県立美術館(2009年)ほか回顧展多数。直近では三重県立美術館(2022年)、宝塚市立文化芸術センター(2022年)、兵庫県立美術館(2022年)、史跡旧崇広堂(伊賀市・2022年)で展覧会が開催された。海外で初となる回顧展は2014年ダラス美術館にて、同じく具体美術協会のメンバーであった白髪一雄の展覧会と同時に開催された。

具体美術の回顧展はローマ国立近代美術館(1990年)、ジュ・ド・ポーム国立美術館(パリ・1998年)、ルガノ州立美術館(スイス・2010年)、国立新美術館(東京・2012年)、ソロモン・グッゲンハイム美術館(ニューヨーク・2013年)、スーラージュ美術館(フランス・2018年)で開催されている。現在、過去最大規模の具体展が中之島美術館、国立国際美術館の2会場にて開催中。(2023年1月9日まで)



元永定正「きいろとふたつ」 1997

ファーガス・マカフリーについて

ファーガス・マカフリーは2006年の設立以来、元永定正、白髪一雄、高松次郎など戦後日本美術の国際的な評価を確立させるうえで中心的な役割を担ってきました。マーシャ・ハフィフ、ビルギット・ユルゲンセン、リチャード・ノナス、ジグマー・ポルケ、カロール・ラマなど独創性に富んだ気鋭の西洋作家の作品展示も行なっています。日本の美術や文化と深く沿うため2018年3月、ロバート・ライマン展を皮切りに東京・表参道にスペースを開設。ニューヨーク、東京、サンバルテルミ島の3箇所にギャラリースペースを持つ。

プレスに関するお問い合わせ:

Tel: 03 6447 2660

Email: tokyo@fergusmccaffrey.com